第８０号　2016 年３月 31 日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース
（宮古･大槌･釜石･障がい者センターかまいし･大船渡･米川･石巻･福島デスク･原町･もみの木･CTVC）

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

2011 年３月 11 日から丸５年を迎えました。新聞やテレビの報道も５年目ということで、精力的に被災地のさまざまな一面を取り上げてくださいました。カリタスベースとして地道に活動を続けてきた各ベースの関係者も、「この日を、ボランティアで関わった地域の方々とベースのスタッフと共に、祈り、活動したい」という熱い思いではせ参じてくださった方々とご一緒に、過ごすことができました。

本号では、その中で、大槌ベースでの平賀司教のミサ、東京で行われた「思いつづけるつどい」、米川ベースの一日、大船渡ベースでの「コンサート」から始まった追悼のつどい、石巻ベースの被災地巡礼の記事をご紹介いたします。

大槌ベースの 3. 11

仙台教区サポートセンター　長谷川　昌子

これまで、毎年の 3.11 には、仙台教区の平賀徹夫司教様が、被災地の教会で「東日本大震災犠牲者追悼と復興祈願ミサ」をささげてきました。震災から丸１年となる 2012 年は元寺小路教会、２年目は大船渡教会、３年目に当たる年は宮古教会、昨年は亘理教会にてミサがささげられ、そして丸５年を迎える今回は、カリタス大槌ベースでミサがささげられました。

岩手県大槌町は、甚大な被害を受けた地域であり、カリタスのベースは、長崎教会管区のご尽力で被災者への支援を続けてきましたが、ここにはカトリック教会はありません。「2016 年の 3.11 は５年目を迎える節目の年、この年の司教ミサを大槌で」と連絡があった時、「エーッと驚きました。でも、次の瞬間、うれしくなりました。このベースというスペースしかありませんが、最善を尽くそうと思いました」と片岡英知ベース長は、その時の驚きとうれしさを語ります。

3.11 当日、大槌ベースでは、朝食後、ベーススタッフの運転する４台の車に分乗し、朝８時 30 分から受付が始まる大槌町役場へ、慰霊の記帳と献花をささげるためにまいりました。白い菊が基調となった慰霊の祭壇が作られている町の慰霊会場には、朝早くからぞくぞくと町民が来ていました。ここは、被災を受け閉校になった大槌小学校をそのまま、大槌町役場として使用しているところです。

大槌ベースからは、都城聖ドミニコ学園の西畑教頭先生に連れられて、「片道 11 時間の旅でした」と説明してくださりながらも元気いっぱいの高校生 10 人と、同学園の卒業生で、現在東京で勉強している３人の大学生、その他、長崎から３人の信徒、広島からは原田豊己神父様と３人の信徒、北仙台のビンセンシオの会の活動の一環として食事作りで大奮闘の菅原さん、それにスタッフの約 30 人が、献花をしました。その後ベースへ戻り、11 時からのミサに備えました。

大槌ベースでのミーティングの様子

ミサは、平賀司教様が主司式、小松史朗神父様と原田神父様が共同司式をしてくださいました。まず、平賀司教様が、「震災から５年。亡くなられたすべての人のため、また、被災して、苦しんでおられる方のため、この方々を助けようとしてくださっている皆さん、心を寄せてくださっている全世界の方々のために、このミサをおささげいたしましょう」という意向を話され、参加者に「これまで、本当にありがとうございました。そして、これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます」と深々とお辞儀をされました。

こうして参加者の心が一つになったところで、ミサが始まりました。

大槌ベースでのミサの様子

この日の典礼は、平賀司教様が準備してくださったもので、第１朗読は、「使徒パウロのローマの信徒への手紙」5・5～11 を、長崎・城山教会信徒の五十嵐さんが、福音はヨハネ 14・１～６を原田神父様が朗読してくださいました。

ホメリアは平賀司教様で、次のように話されました。

「東日本大震災から丸５年がたちました。大震災後から心を寄せ、支援のために働いてくださった皆さん、本当にありがとうございます。皆さんのお働きは、被災者の方々から見ても、ありがたいことですが、神様の目から見ても価値あるものです。

2011.3.11 は、灰の金曜日に当たっていました。その年の聖金曜日に教皇ベネディクト 16 世は、全世界から送られて来た質問のうち、７人の質問に答えてくださいました。

そのうちの１つは、日本の７歳の松本えりなさんという女の子からのものでした。『教皇様、今、日本では大震災で苦しんでいる子どもがいます。教皇様なぜ、子どもが苦しむようなことを神様はなさるのでしょうか。教えてください』というものでした。

教皇様は、『私にもわかりません。なぜ、愛である神様が、苦しい経験をさせるのか、私にもわかりません。それでも、私は愛である神様が、１人ひとりを愛しておられるのを知っています』とお答えになられました。

福音は、イエスが十字架にかかるのは、父なる神の目的に向かっていくこと、『その心を信じなさい』と言います。信じなさい。何を信じたらいいのでしょうか。

今の教皇フランシスコは、この１年間を『神のいつくしみの特別聖年』とお決めになりました。神のいつくしみを味わい、育てる１年なのです。

教皇様が出された大勅書の中にこのような言葉があります。

『イエス・キリストは、御父のいつくしみのみ顔です』。９番には、『神のいつくしみは、私たちに対する神の責務』です。神は、責任を感じているのです。私たちの幸せを望み、私たちが平和で、喜んでいることを、神は見たいのです。望んでおられるのです。キリスト者のいつくしみに満ちた愛は、神の愛と同じ波長をもつものです。

私たちが『信じます』と言うとき、神の心を生きる生き方をするということです。なぜ、こんな苦しみがあるのかわからない。しかし、喜びと、平和を見つけて生きるのです。

ミサは、神のいつくしみのあらわれそのものの記念です。イエス様、信じます。希望をくださり、心に注いでくださることを信じます。私たちに力をください。私たちもやっていきますから、と祈りましょう。」

ミサ後、昼食を取り、その後、マストというショッピングセンターで開催中の伊藤陽子さんの写真展を見に行きました。伊藤さんは、震災直後からほぼ毎日、大槌の写真を撮られ、今回の写真展では、震災前から今年２月までに撮影した街並みなどが紹介されていました。

城山公園から望む町の様子　（右下は、震災前の大槌町中心市街地の写真）

「思いつづける 3. 11～ 犠牲者・被災者・避難者のために祈るつどい～」

CTVC-カトリック東京ボランティアセンター　漆原比呂志

３月 11 日、東日本大震災発災から５年が経ちました。

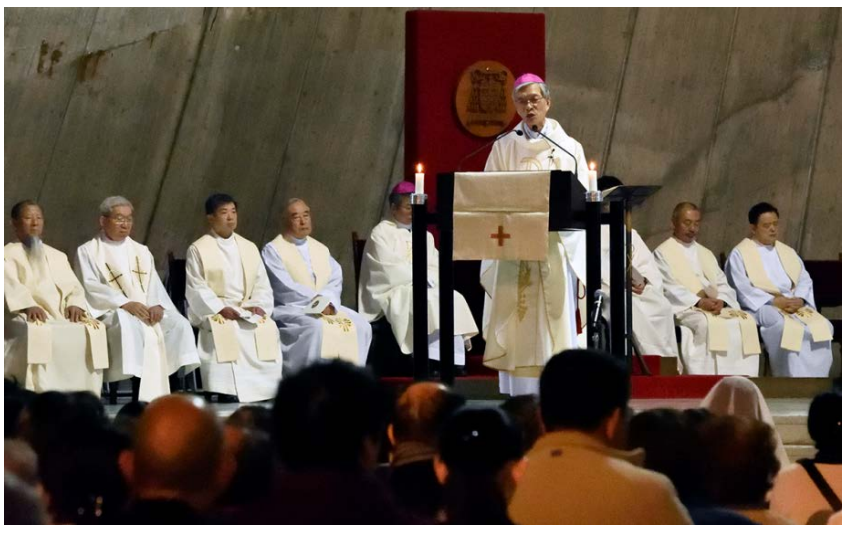
カトリック東京大司教区では、2012 年から毎年、この日は「思いつづける 3.11～犠牲者・被災者・避難者のために祈るつどい～」と題した追悼・復興祈念行事を行っています。

今年もカトリック東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂にて開催されました。

このつどいは２部形式で行われ、第１部はオルガンメディテーションとして、オルガンの響きに耳を傾けながら、静かに被災地に心を寄せ祈る時間となりました。南相馬市出身の青田絹江さんによるパイプオルガン独奏に始まり、荒木泰俊さんの指揮、神林紘一さんによるテノール、そして国立音楽大学創立 90 周年記念合唱団による荘厳な演奏の中で黙想し、祈りをささげました。

そして第２部では、震災後福島県いわき市から東京へ自主避難している歌手の YUKARI さんが、ご自身の作詞作曲による故郷への思いと今の気持ちをのせた曲を歌い上げる中、震災直後から現在までを映像で振り返りました。午後２時 46 分には鐘が鳴り響き、皆で黙祷をささげました。

ミサは、岡田武夫大司教主式、幸田和生補佐司教、東京教区の司祭数名による共同司式で執り行われ、聖歌隊にはイエスのカリタス修道女会スモールクワイアの皆さんの美しい歌声が響く中、約 600 名の参列者がおもいを一つに祈りを捧げました。



共同祈願では岩手県、宮城県、福島県のボランティアに参加された方々が、関わっている被災地の方々のための祈りをささげ、８つのカリタスベース（宮古、大槌、釜石、大船渡、米川、石巻、原町、いわき）からは仮設住宅でつくられた手芸品など、それぞれの活動を象徴するものを送っていただき、参列者に紹介するとともに祭壇に奉納しました。

５年という節目を迎え、被災地の方々と参加者の方々の特別な思いが交じり合い、ひとつの祈りとなった１日でした。これまで５年間にわたるカトリック教会の被災地支援活動が、常に祈りとともにあり、お互いの祈りの力に支えられてきたこと、そしてこれからも祈りながら支援活動を続け、被災者・避難者の方々に寄り添って歩みたいという思いをともにする時間となりました。

被災地では、被災者の方、避難者の方から「私たちのことを忘れないでほしい」という言葉をかけられます。時間の経過や日々の生活の積み重ねの中で、「忘れない」ということがいかに難しいことかを、私たちは実感してきました。３月 11 日の集いを東京で最初に企画した際、名称を考えるにあたり、私たちは「忘れない」こと以上により積極的な願いとして「思いつづける」としました。今こそ、そしてこれから、被災者支援活動を通して、私たちが「思い続けている」ことを実際に具体的なかたちで示していくことがとても大切なことだと思います。そこに教会の使命と役割があると思います。

カリタス８ベースの品を奉納

震災から丸５年を迎えて

カリタス米川ベース

　あの日から５年目を迎えました。
愛が深すぎるあまり、悲しみも深すぎて、今まで誰にも何も言えなかった人たちもいるのだと思うと、５年という時間は短いのかもしれません。

　３月 11 日、当日のボランティア活動は、午前中、南三陸町の歌津地区でのワカメ出荷のお手伝いと、戸倉地区での定置網のお手伝いに行ってきました。

　午後は、皆で海辺に集まり、14 時 46 分に黙祷をささげました。それから皆で自然の貝や流木で献花台をつくり、お祈りしました。

　夜は、19 時 30 分から米川教会で追悼と復興の祈りをささげました。5 年前に亡くなられた人たちのため、漁業復興のため、子どもたちのため、原発で苦しむ人たちのため、南三陸町のために、心を合わせてお祈りをしました。

　この日の気持ちを忘れずに、これからも一日一日を大切に生きていきたいと思います。

南三陸町袖浜海岸にてお祈りをするボランティアさん

これからも地域の方々に寄り添っていきたい

カリタス大船渡ベース

　３月 11 日の直前の日曜日の６日、大船渡市三陸町越喜来にある三陸公民館で、「けせん第九を歌う会」が、演奏会「鎮魂」を開催しました。けせん第九を歌う会のほか、陸前高田、仙台、東京の合唱団と仙台フィルハーモニーオーケストラの有志約 120 名が参加し、大船渡教会の信者４名も参加しました。あの日と向き合い、悲しみを悲しみとして歌うことに目を背けることなく歌い上げた心揺さぶる歌声でした。会場は鎮魂と心の再生の願いに包まれました。

大船渡教会から見える町の風景（2016 年 3 月 11 日）

　今年の３月 11 日は５年前と違って、穏やかに晴れた暖かな日でした。大船渡教会では 13 時半から、大阪の堺教会の村田稔神父様とエドガル神父様との共同司式で追悼のミサがささげられ、約 30 名参加しました。堺教会からも２名の信者さんが参列されました。村田神父様の説教では、神父様が防潮堤をご覧になってお感じになったお気持ちを率直に分かち合ってくださいました。

　祭壇には、津波に流された納骨堂に納められていた 11 名、あの日に帰天された信者５名の方々の名簿と焼香台が設けられ、ミサ中に参列者全員で焼香をささげました。

　14 時 45 分に市の放送が流れ、46 分にサイレンが鳴ることを告げ、黙祷をする旨を告げました。それぞれの場で手を合わせ目を閉じ、ある人は海の方に目を向け、その時を待ちました。14 時 46 分、サイレンと教会とお寺の鐘が一斉に鳴り響き、皆、黙祷をささげました。

　また、14 時半より市民文化会館リアスホールにて県と市の合同追悼式典がありました。ステージには「東日本大震災犠牲者之霊」と書かれた標柱を菊の花で囲んだ祭壇が設けられ、その隣に大型スクリーンを設置して政府主催の追悼式の様子が放映されました。14 時 46 分に１分間の黙祷をささげ、首相の式辞などに耳を傾けました。式に移り、知事や市長ら来賓の方々の挨拶の後、遺族の代表者が祭壇の前に立ち、追悼の言葉を述べました。この後、赤崎小学校が被災したため、蛸ノ浦小学校の校舎でともに学ぶ、震災当時１年生だった両校の６年生２６名が「旅立ちの日に」「花は咲く」を献歌しました。式典終了後、参列者は一人ずつ祭壇に献花しました。

　大船渡ベースでは、18 時よりホールにて追悼夕食交流会を行いました。堺教会の方、元スタッフのシスター、大船渡教会の方々、ボランティア、スタッフの計約 30 名が集いました。懐かしい方がお越しになり、旧交を深めておられたり、初めてベースへいらした方は、教会の方々とお話しされたりと和やかな交流のひとときとなりました。

　ベースには、大船渡だよりに掲載してきた定点写真、大船渡教会の方の詩等を展示しました。また、交流会の初めに、エドガル神父様からベース長交代の挨拶があり、新ベース長として菅原圭一氏が紹介されました。夕食会最後には、全員の自己紹介があり、皆様が震災を通して感じておられることに触れました。

　新ベース長の挨拶にあった「遠方から応援してくださる方々の思いを形に変えていきたい」との言葉を胸に、地域の方々に寄り添っていきたいと心新たに思う日となりました。

大船渡ベースでの追悼夕食交流会の様子

あの日から丸５年、被災地の石巻ベースで「ハンドベル演奏」と「被災地めぐり」へ参加

仙台教区サポートセンター　小野　武

東日本大震災から丸５年を迎えた石巻ベースでは、被災地の方々が震災発災の日をそれぞれの思いで迎えられるように、午前中は「ハンドベルの演奏」、午後は「被災地めぐり」、「オープンスペースでのお茶会」と「市の追悼式」へ自由に参加できるよう工夫されました。

私は、「ハンドベルの演奏」と「被災地めぐり」に参加させていただきました。その様子をご紹介いたします。

「ハンドベル演奏」は、ベースのオープンスペースで１０時３０分から行われました。演奏は、上智大学のハンドベル部の学生８人です。被災地の方と共に歌いながら演奏したいとの思いから、多くの方が知っている懐かしい曲「春の小川」「七つの子」「夕焼け小焼け」「大きな古時計」「上を向いて歩こう」「花は咲く」などが演奏されました。

参加された方１２名は、それぞれの思いを込め、オープンスペースいっぱいに響きわたる声で清々しく歌われました。演奏の途中に、ハンドベルの鳴らし方、音階により大小の大きさがあること、ピアノの白鍵と黒鍵に相当することなどの説明がされました。

来られた学生は、一年生が中心で、参加された方の孫のような１８歳から２０歳の若い学生なので、参加者は、目を細めて見ておられました。演奏の後は、お茶を飲みながら、出身地などを聞きながら会話が弾みました。

「被災地巡り」は、１３時３０分にベースを出発して、特にひどい被害を受けた門脇地区を通り、日和山山頂で追悼の祈りをささげることとしました。門脇地区は、かさ上げ工事と復興公営住宅の建設の真っ最中で、ダンプが砂埃を上げながら走っていました。震災遺構として、残すかどうか決まっていない門脇小学校は、白いシートで覆われていました。被災に遭ったお寺や津波に流されなかった蔵などで被災状況を確認しながら、とても急な石段を息を切らしながら登り、日和山山頂にたどり着きました。

着いたのが１４時ころでしたが、もう多くの方が集まっていました。報道関係のカメラが慌ただしく準備の最中でした。

防災無線放送が流れ、１４時４６分に近づき、一帯が静寂となり、黙とうがささげられました。石巻ベースからは、ベーススタッフ、ボランティアと上智大学生総勢１２名が参加しました。丸５年、それぞれの方がそれぞれの思いで海に向かって祈られていました。

旧石巻市門脇小学校校舎　　震災遺構として一部もしくは部分的に保存される予定

実は、ハプニングがありました。黙とう開始のサイレンを鳴らすのを市の担当者が失念したのです。あとから、防災無線放送で何回か謝罪のアナンスが流れ、担当者も祈りに専念して、時を逃したのかなと思いました。

被災地では、これから仮設住宅から復興公営住宅への引っ越しが本格化します。いろいろなところから、抽選で入居されるので、新たなコミュニティづくりが求められます。まだまだ、自立には、時間がかかります。今まで同様に被災者の方との「共に寄り添う活動」を大切にしたいと思いました。

《日和山からの眺め　2015 年・2016 年》

2015 年 3 月 11 日 撮影

2016 年 3 月 11 日 撮影

石巻市門脇地区　復興公営住宅の建設が進んでいます

《被災地視察ツアー休止のお知らせ》

ニュースレター第 76 号にて、被災地視察ツアー「被災地は今！」の開催日程（2016 年３月～9 月分）をお知らせしましたが、諸般の事情により、６月以降のツアーを休止させていただくこととなりました。

４月、５月のツアーは、多くのお申し込みをいただき、既に定員に達するという盛況の中で、６月以降のツアーが休止となり、ご参加をご検討されていた皆様へは、大変申し訳ございません。今後、再開する場合には、ホームページやニュースレターにてお知らせいたします。何卒よろしくお願い申し上げます。

～～～